

# やまと 民俗への招待

鹿谷 熱

東大寺の転轍門から西に延びる一条通りが佐保川を越え、ちょうど奈良女子大学の北側にあたる所に、奈良市法蓮の中心集落がある。江戸時代には奈良町周囲の「奈良廻<sup>まわ</sup>り八力村」の一つで、この辺りから北西方面に広い領域があり、石高は1400石近くもあった。

法蓮は、貞享4(1687)年の『奈良曝』を見ると南北の「法蓮町」に分かれ、北は11軒の百姓町で、「いにしへ聖武天皇此所ニ長幡寺、福王寺、長福寺、明覚寺とて四ヶ寺を建立し給ひ、法花經を納めさせ給ひしゆへ法蓮と名付し。」とあります。南は8軒である。ま

た享保2(1717)年の『奈良坊目拙解』には、古老人の談として、かつて興福寺の法蓮法師が住居したのでこの名があり、もとは広岡と呼ばれていたと記されている。明治14、15(1881、82)年ごろには戸数112戸、人口561人となり、その後住宅開発が進み、広い地域に新しい自治会が数多く生まれ、平成25(2013)年には戸数3615戸、人口8010人を数えていた。



法蓮のシンニチ（春日）講  
=筆者提供

## 住宅地に息づく「講」

人をはじめ大富人の住まいだった土地は、市街化され変貌を遂げて今は落ち着いた住宅地となつては、「会所方」という現

在60戸からなる組織があり、東脇、西脇、南脇東、南脇西の四つの組に分かれている。この組ごとにシンニチ講と呼ばれる講が今もある。シンニチ講は春日信仰に基づく春日講で、毎年4月、組ごとに当番を決め、自宅で講を催していたが、昭和51(1976)年ごろから法蓮会所で4講合同で行うようになり、さらに一

昨年からは近くのホテルリガーレ春日野（旧春日野莊）で開かれるようになつた。興福院へ通じる桜並木が満開の4月7日正午、会場に四十数人が集まつた。正面に春日鹿曼荼羅を掲げ、葉付き大根や鯛や竹の子などの供物が捧げられている。会所方の役員辻中二三夫氏の司会で掛け時数氏がお祓いをしてから会所方総代の竹川善章氏や当番の人々が玉串を捧げて神事が執り行われ、近年頻発する災害などがないことを祈つたあと和やかな直会となつた。民家でシンニチ講が行われていた頃は、この当番を契機として、家の屋根替えや新築などを行っていたといふ。